

R. シュトラウス  
13管楽器のためのセレナード 変ホ長調 op.7

ヒンデミット  
弦楽と金管楽器のための演奏会用音楽  
op.50

I. Mäßig schnell, mit Kraft - Sehr breit, aber stets fließend  
II. Lebhaft - Langsam - Lebhaft

休憩 (Intermission)

## 高橋 勇太 (指揮)



1978年東京生まれ。指揮を村方千之氏に師事。東京学芸大学音楽科を卒業。

1997年より3年にわたり、ドイツ・バイロイト音楽祭で、その後ドイツ国内のライン・ドイツ・オペラ、ドレスデン国立歌劇場、デュイスブルク交響楽団、オーストリアのウィーン・フィルハーモニーで研鑽を積む。2001年スイスのマスター・プレーヤーズ国際指揮者コンクールでディプロマ賞を受賞。2002年ルーマニア国立歌劇場におけるオペラ「夕鶴」の現地初演の副指揮者を務める。2005年、東京を中心にオペラ・オペレッタ・ミュージカルの各公演を立て続けに指揮してデビュー。東京大学フィロムジカ管弦楽団の常任指揮者、シェエット交響楽団の常任指揮者、音楽監督を歴任。日本オペラ振興会の指揮スタッフを始め、フリーの指揮者として各地のオーケストラ・オペラ等を指揮する。

2010年以降、ヨーロッパやアジア各地のオーケストラ・オペラ座に招かれて公演を指揮する。2010年のブルガリア・シューメン市立フィルハーモニーの「オール・ドイツ・プログラム」、ベトナム・ハノイ 国立オペラ座での「第九」、2011年のルーマニア国立コンスタンツア歌劇場のオペラ「ルチア」各公演は、大成功を収め、特にルーマニア国立歌劇場ではリハーサルと公演に於けるソリスト・楽団員との厚い信頼関係が好評で、即座に同年秋の国際フェスティバル「カルミナ・ブランナ」公演へ招聘を受ける。その後、オペラ・オーケストラ公演共に客演を重ねる。

現在は東京シティオペラ協会指揮者、現代音楽集団アンサンブル・ロカ常任指揮者。

また2006年より在京のプロオーケストラとしては異例の若さで、東京サロンシフォニーオーケストラの常任指揮者に就任。以降、10年以上にわたり、北海道から九州・沖縄まで全国で200回以上の公演を行っている。2015年、黒海指揮者コンクールで準優勝。東京・練馬区在住。

## プログラムノート

### R. シュトラウス 13管楽器のためのセレナード 変ホ長調 op.7

フライハイト交響楽団は、創立時よりリヒャルト・シュトラウスの作品を好んで取り上げてきました。ところが、大編成の豪華なサウンドを愛するフライハイトでは、木管楽器奏者が愛するこの小さな曲を演奏する機会はありませんでした。2020年、コロナ禍で実施可能な演奏会を検討した際に、ステージ上の人数制限との兼ね合いから、小編成の曲をプログラムすることになり、私たちは喜んでこの曲を推薦しました。しかし2021年2月に計画していたコンサートは、その後の感染拡大状況により中止に。今回はやっとこのプログラムをお届けできることを、とても嬉しく思います。

作品番号7の「セレナード」はリヒャルト・シュトラウス初期の作品であり、作曲は17, 8歳の頃と言われています。高名なホルン奏者であった父親のフランツ・シュトラウスは、ミュンヘンでアマチュア・オーケストラWilde Gunglの指揮者を務めていました。リヒャルトも数年間ですが第1ヴァイオリン奏者として在籍しており、セレナードはちょうどその頃の作品です。初演は1882年11月にドレスデンで行われました。ミュンヘンを離れて初めての主要な初演であり、この曲が大指揮者ハンス・フォン・ビュローに認められたことで、リヒャルト・シュトラウスは作曲家としても指揮者としても輝かしいキャリアを歩みだすことになります。

編成はフルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4。楽器編成は少々異なりますが、同じ13人で演奏されるモーツアルトの「グラント・パルティータ」が念頭にあったことは間違いないでしょう。単一楽章のソナタ形式で、演奏時間は約10分。若き日の作品でありながら、緻密な管弦楽法とロマン

メンデルスゾーン  
劇音楽「夏の夜の夢」序曲 op.21

ベートーヴェン  
交響曲第1番 ハ長調 op.21

第1楽章:Adagio molto - Allegro con brio  
第2楽章:Andante cantabile con moto  
第3楽章:Menuetto ; Allegro molto e vivace  
第4楽章:Adagio - Allegro molto e vivace

■弦楽と金管楽器のための演奏会用音楽

ボストン交響楽団創立50周年記念の委嘱作品であり、曲名通り、弦楽器と金管楽器(ホルン4、トランペット4、トロンボーン3、チューバ)という非常に珍しい編成。

I部とII部があるが、それぞれいくつかの部分に分かれています。I部は「急→緩」、II部は「急→緩→急」と緩急に富んだ構成となっています。

I部

・Mäßig schnell, mit Kraft ほどよい速さで、力強く  
・Sehr breit, aber stets fließend 非常にゆったりと、しかし絶えず流れるように

II部

・Lebhaft 生き生きと  
・Langsam ゆっくりと  
・Im ersten Zeitmass 最初の速さで

弦楽器の美しい音色と金管楽器の重厚なサウンドが織りなす色彩感、複雑なリズムと不協和音が生み出す幻想的な緊張感、弦楽器と金管楽器の絶妙な掛け合いによる躍動感など、ヒンデミットの魅力が凝縮された名曲である。  
(山崎 浩司)

### F. メンデルスゾーン 劇音楽「夏の夜の夢」序曲 op.21

クラシックの作曲家=経済的・社会的困難を少なからず抱え、たいてい独特なこだわりがあり、良く言って健全な人間関係の形成が苦手、といった一般的なイメージに全くあてはまらない、数少ない例外であるフェリックスは、裕福な銀行家という経済的・社会的に恵まれた環境に生まれました。当代一の学者や芸術家、文化人などに囲まれ、幼少期より音楽のほか美術や文学、哲学など一流の教育を受けており、多くの才能を開花させることができました。

作曲家としては、ヴァイオリン協奏曲を筆頭に、序曲「フィンガルの洞窟」、交響曲第3番「スコットランド」、同第4番「イタリア」などの管弦楽曲のほか、弦楽八重奏曲、歌曲「歌の翼に」、ピアノ曲「無言歌集」といった室内楽や独奏曲など、幅広いジャンルで代表的な作品を数多く残しました。

またピアノ、オルガンといった鍵盤楽器奏者としての活動はもちろん、今日的な意味での「指揮者」として音楽活動を行った最初期の音楽家でした。

また、再演が現代ほど重視されていなかった19世紀初頭にJ.S.バッハの「マタイ受難曲」を蘇演し、楽譜の校訂や編集を行い、ライツィヒに音楽院を設立するなど研究者、教育者としても活躍しました。当時としても長くはなかったであろう生涯の中で、当時の音楽家として考えうるほとんど全ての立場から偉大な功績を残しています。

さてこの序曲はもちろんシェイクスピアの有名な戯曲「夏の夜の夢」にインスピレーションを得た作品で、1826年、フェリックス17歳の作品です。もともとは姫アニーと優雅に連弾するために作曲され、その後、演奏会用序曲という単独の管弦楽作品として仕立てられました。この序曲に感銘を受けたブロイセン(ドイツ)国王の命によって、舞台上演のための音楽を作曲することとなりました。この序曲を、「夏の夜の夢」の世界観を表現するOP曲とし、有名な結婚行進曲、スケルツォ、夜想曲などの劇付随音楽(現代でいうとサウンドトラックですかね)を10数曲用意しました。

序曲の大雑把な構成としては、木管楽器の合奏による序奏によって夏の夜の森へ誘われると、快速な主部へ続きます。軽やかに妖精が飛び回る様子に始まり、劇中のさまざまな場面のイメージが幻想的に活き活きと表現されます。そして再び木管楽器による後奏によってお伽噺に終わるが訪れ、すべてが一夜の夢であったことが妖精バックの口上「われら役者は影師…」で語られます。

この序奏と後奏によってお伽噺を語っているかのように聞き手に認識させるアイデア、調性の選択や和声の進行などは、フェリックス17歳からおよそ60年後の1888年、リムスキー=コルサコフ44歳が一千一夜物語に着想を得て作曲した交響組曲「シェエラザード」に控えめに言って受け継がれています。

筆者は大学生時分に、大教室の後方にひっそり座り、専攻である法学を学ぶ傍らで、古典文学の文庫本を生協の書店で買ってはひたすら読んでおりました。当然ながら「夏の夜の夢」も読みましたが、思い浮かぶ場面のイメージは、小学生の時に姉の本棚から拝借して読んだ「ガラスの仮面」の中で、北島マヤが妖精バックを演じた劇

団つきかげの公演でした。

(恐ろしい子)

### L.v. ベートーヴェン 交響曲第1番 ハ長調 op.21

有望なピアニストとしてウィーンの楽壇に登場したベートーヴェンは、ほどなくして聴覚の病に悩まされるようになり、遺書を書くほど苦惱した末、作曲家として生きる決意を固めました。過酷な運命に立ち向かいながら自己の内奥を見つめ、9つの交響曲、32のピアノ・ソナタ、15の弦楽四重奏曲、10のバイオリン・ソナタや5つのチェロ・ソナタなど作品番号がつけられているだけでも130を超える作品を残しました。これらはベートーヴェンの波乱の人生、不屈の魂の結実として、彼の死後、現在も、多くの作曲家、演奏家、聴衆を魅了し続けています。その中にあって本作などの「英雄」交響曲以前の作品は「初期」作品に分類され、彼の創作の源泉である自らの苦悩の告白、闘争から歓喜へ至る物語性などの作品への昇華の度合いが弱く、基本的に古典的な表現の枠組みにとどまっており、「ベートーヴェンにしてはベートーヴェンらしさに不足している」と妙な評価をされてきました。というのが、まあこんな私たちが描きがちなベートーヴェンの人生まとめと交響曲第1番の評価です。

さて若きベートーヴェンは音楽家として社会に認められるため、まずピアニストとして名を上げたのち、ピアノ・ソナタ、ピアノつきの室内楽、管楽アンサンブル、弦楽四重奏曲、弦と管楽器のアンサンブルと様々な組合せを計画的に試しながら作曲の腕を磨き、満を持して作曲家としての存在を世に問うべく交響曲第1番を発表したのでした。

しかしながら、当時としては大胆な管楽器の使用や極端なダイナミクスの変化、意表を突く和声進行など、いまの私たちが「ベートーヴェンにしてはまだ不足しているベートーヴェンらしさ」として認識する部分が原因で、評価はそこまで好意的ではなかったようです。

というのも、ベートーヴェンが作曲を始めた18世紀末頃の作曲家に求められていたのは、喜怒哀樂という普遍的・客観的な感情やいわゆる真善美といった理想の世界、調和の取れた世界を巧みに表現することであり、神の栄光を讃えたり、神話の世界を扱った叙事的なテキストを用いた声楽作品が主流でした。作曲家や演奏家はその様式美に則った世界を職人的に表現するために存在しており、作曲家や演奏家自身の個人的な感情・主観を持ち込むことで、均整のとれた世界観から逸脱した表現をすることは未熟であるとされていました。しかしベートーヴェンは独立した個人としての自己実現を目指し、自己の感情や思想を、交響曲や弦楽四重奏といった普遍的フォーマットに落とし込んで表現した、最初の世代の音楽家でした。

現代の私たちには、ベートーヴェンの生涯を、艱難辛苦がありながらも第九に至った物語として、後付けで俯瞰できてしまします。聴力を失い、自らの人生に絶望しながらも数々の強烈で独創的な作品を生み出したベートーヴェンを知っています。ベートーヴェンというキャラクターの完結した人生の物語、という価値観での交響曲第1番の位置づけは、ベートーヴェン1.0とでもいうべき段階、あるいはRPG的な世界観のシナリオでいえば、やっと自分の生まれた村を出られるところかもしれません。しかし明るい希望とユーモア、活力に満ちたこの作品からは、人生の行方や創作の結果を知る由もない、若く健康なベートーヴェンの、当時の音楽や美学の通念に挑戦し、ここから芸術家として世界に打って出ようという気概に満ちている彼の姿が浮かぶようです。

第1楽章:ハ長調の健康的なイメージを裏切る緊張感ある和音進行で始まる序奏や、快速な主部での極端なアクセントづけ、主和音の連打で締めるところなどに、ベートーヴェンらしさの萌芽を感じることができます。

第2楽章:全体的に穏やかな気分の楽章ですが、第2バイオリンから始めることで、オーケストラにとってある意味で緊張感を生み出しています。

第3楽章:交響曲の慣例どおり流行りの舞曲樂章をおき、メヌエットと称していますが、すでにベートーヴェン以前のメヌエットの枠に収まらないグルーヴ感が顕れています。

第4楽章:どこに行くかわからない序奏に始まり、快活な主部へ続きます。英雄以降の交響曲と比べてあっさりと終わるところも、まだハイドン・モーツアルト時代の音楽世界の名残りがあり、ベートーヴェンらしさに不足すると言われる一因かもしれません。

(個人の感想ですよね)  
杉山 雄介